

学校飼養動物支援事業について ～豊かな人間性を育む動物飼育～

動物愛護センター「ハローアニマル」

○糸賀綾子 清澤哲朗 熊谷彰芳 松澤淑美 宮本仁志
高橋葵 久保田耕史 鷹野裕司 小林正直 藤森令司

1 はじめに

子どもの教育のために園や学校で動物を飼育することは、飼育を通して観察力や判断力を養い、命の大切さを学ぶとともに仲間との連帯感、他者を思いやる心、協調性など社会生活を送るうえで欠かせない要素、つまりは『生きる力』を獲得させることが狙いである。

一方で近年発生した高病原性鳥インフルエンザの影響で人と動物の共通感染症に対する関心や不安が高まり、学校で飼育する動物についても今まで以上の配慮が必要となっている。

しかし、動物の適正な飼育管理や教育面での活用方法等において多くの課題があるのが現状であり、ハローアニマルではこれまで（一社）長野県獣医師会と協働で、幼稚園および小中学校を対象に『学校飼養動物支援事業（以下、支援事業とする）』を実施してきた。

今回、支援事業を実施したことのある施設を対象にアンケート調査を行ったのでその結果を報告する。

2 実施方法

（1）支援事業について

- ①ハローアニマルが窓口となり、学校からの相談や支援事業の依頼を受ける。
- ②（一社）長野県獣医師会へ獣医師の派遣依頼をする。
- ③ハローアニマルと獣医師会の獣医師が学校を訪問し、授業を行う。
- ④後日、その後の様子の聞き取りや要望があれば再度支援事業を実施する。

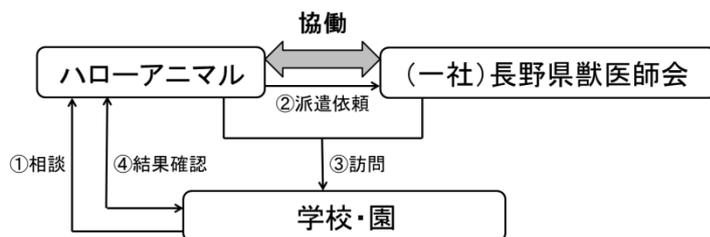


図1 支援事業の流れ

表1 支援事業の主な内容

飼育管理 (ハローアニマル)	動物の習性・生態
	適正な食餌、飼育環境
	接し方
健康管理 (獣医師会)	心音を聴く(命の話)
	健康チェックのポイント 病気・怪我

（2）アンケート調査について

- ①調査対象 平成20年度から26年度に支援事業を実施した幼稚園、および小学校。合計53校。
- ②調査期間 平成27年1月21日から平成27年2月10日まで。
- ③調査方法 アンケート用紙を郵送し、FAXで返信を依頼。
- ④調査内容 i) 現在の動物飼育の有無

- ii) 動物を飼育している場合、その動物種および飼育状況等
- iii) 飼育していない場合、今後どんな動物を飼育してみたいか
- iv) 支援事業を受けた前後で変化はあったか
- v) 今後、支援事業を受けたいか
- vi) 今後、学校飼育動物に関する研修会があれば参加したいか

3 結果

(1) 支援事業の実施状況

2回以上実施している学校及び園は16施設で全体の約30%を占めた。地域は東信が多い。また、動物種においてはうさぎが最も多い。

表2 支援事業の実施数

	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年
小学校	11	13	11	11	16	12	9
幼稚園	3	3	1	2	4	1	0
計	14	16	12	13	20	13	9

表3 地域毎の実施数

	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年
東信	13	14	5	7	11	4	4
北信	0	2	4	2	4	2	0
中信	0	0	3	2	4	6	3
南信	1	0	0	2	1	1	2
計	14	16	12	13	20	13	9

表4 動物種

	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年
うさぎ	14	14	11	11	18	12	7
やぎ	0	3	0	0	2	0	2
めん羊	0	0	0	0	0	1	1
モルモット	0	0	2	0	1	0	0
犬	0	0	0	2	0	0	0
鴨	0	0	1	0	0	0	0

(2) アンケート調査の結果

①回答数 33校 (回答率62%)

②集計結果

i) 現在の動物飼育の有無

動物を飼育している29校。飼育していない4校。

ii) 動物を飼育している場合、その動物種および飼育状況等

ア 飼育している動物の種類

結果は表5のとおりでうさぎが最も多く、全体の約65%を占めた。

表5

うさぎ	鶏	羊	ヤギ	かめ	犬	豚	ちゃぼ	ふな	熱帯魚	あひる
22	3	2	2	2	1	1	1	1	1	1

イ 飼育場所

屋外が27校、屋内が5校だった。両方という回答もあった。

ウ 継続して飼育している年数

結果は表6のとおりで、3年以上が約70%を占めた。そのうち10年以上という学校は36%を占め、最も多かった。

表6

1年未満	1年	2年	3～10年	10年以上
3	2	3	8	9

エ 飼育担当の学年

結果は表7のとおり。低学年が多い。その他とは幼稚園や職員である。

表7

1・2年生	3・4年生	5・6年生	児童会	特別支援学級	その他
12	10	4	4	1	3

オ 日誌の有無

有り12校。無し17校。

カ 前年度の飼育担当者からの引き継ぎの有無

有り25校。無し2校。

キ 困っていること

表8

飼育管理に関すること	15件
・雌雄不明・混同	5件
・適正飼育の方法	3件
・エサの調達	2件
・繁殖方法	2件
・防寒対策	2件
・野生鳥獣対策	1件
人と動物の共通感染症	2件
病気	1件

iii) 動物を飼育していない場合

ア 今後動物飼育をしてみたいか

はい1校。いいえ3校。

『いいえ』の理由としては、「鳥インフルエンザやアレルギー等の心配があり、飼わないという方針になっている」「飼育小屋が壊されて飼育できる環境でない」といったことが挙げられていた。

イ 飼育してみたい動物種

うさぎが1校。

iv) 支援事業を受けた前後で飼育状況や児童の様子等に変化はあったか。

表9

あった	なかった	わからない	無回答
15	0	13	5

『わからない』という回答は担当教員が異動等で変わったためという理由がほとんどであった。

『あった』と答えた施設のうち、どのような変化があったかは表10のとおり。

表10

飼育状況	飼育環境・飼育方法の改善	3件
	管理体制が整った	1件
児童の様子	関心、意欲が高まった	10件
	生命の理解	4件
	優しくなった	2件
	観察力の向上	2件
	忍耐力の向上	1件

v) 今後、支援事業を受けたいか。(図2)

はい23校。いいえ6校。

vi) 今後、学校飼育動物に関する研修会があれば参加したいか。(図3)

はい21校。いいえ10校。

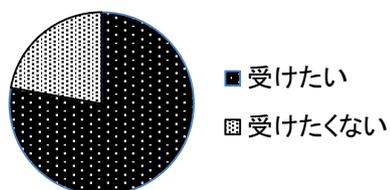


図2 支援事業について

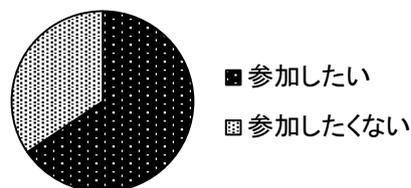


図3 研修会について

5 まとめ及び考察

支援事業の実施数が減ってきたことは、継続して支援事業を実施してきた学校に対する支援が必要なくなったことが一因と考えられる。また、これまでハローアニマルでは動物飼育担当者間での連絡や引き継ぎがうまくいっていない現状を踏まえて、日誌をつけることや引き継ぎの大切さを伝えてきたが、今回のアンケートで前年度の飼育担当者からの引き継ぎは約76%の学校で行われていることがわかった。これらのことは支援事業の効果と考える。

さらに、東信地域以外の実施数が増えてきたことは、支援事業が全県的に普及してきたものと思われ、これまでの広報の成果であろう。しかし、現在においても飼育方法や動物についての正しい知識のないまま飼育を始めてしまったというケースがあり、動物についての相談先が少ないことが原因と考えられる。相談先の1つとして活用してもらえるようさらに支援事業をPRしていく必要がある。

次に、支援事業実施後に飼育状況の改善や児童の関心、意欲が高まったなどの変化がみられ、今後また支援事業を受けたいとの回答が多かった。獣医師会と協働することにより、より幅広いニーズに対応でき、学校側の満足度を高め、さらに学校飼育動物がもつ教育的効果を向上させることができたと考える。

最後に、動物飼育は飼育を行うことで子どもたちにどういったことを学んで欲しいかを明確にした上で実施することが大切であり、ハローアニマルでは数年前より支援事業の一環で地域の教育関係機関が主催する研修会で動物飼育から得られる様々な効果を提示し、さらにその効果を最大限に得るために『ただ飼う』のではなく、『適正な飼育環境で飼う』ことの大切さを伝えてきた。アンケート結果でも研修会があれば参加したいとの回答が多かったため、今後も教育関係機関と連携し積極的に開催していきたい。

今後、より身近な存在として学校と関わりあえるよう事業を発展させていく。